

流行り謡にみる江沢民政権下の中国社会

岡 益 巳

1. 序

岡の一連の研究（岡益巳[1995a, 1995b, 1995c, 1995d, 1997a, 1997b]）を除いて、開放政策下の流行り謡を取り上げた本格的な研究は見あたらず、論文としては、約九十篇の流行り謡を取り上げた趙金銘[1989]が存在するのみである。このほか、まとまった形の著作としては、資料集の性格の強い甘棠[1988, 1989]、手軽に読める一般書には串田久治[1990]、樹建・左愚[1994]、陸非瑯[1998]、魯文[1998]がある。また、隔月刊の『西藏文学』が一九九八年の秋に流行り謡を特集した『漫話中国新民謡』と題する増刊号を発行している。

岡[1995d]では、流行り謡の ①定義づけ、②言語構造の分析、③歴史的意義の解明を行うとともに、一九七八年の現代化路線の採用から一九九四年の鄧小平の完全引退までの時期を鄧小平の時代と認識し、同時期の流行り謡を収集分析することによって、民衆の目線でみた中国社会の現状を明らかにした。この時期の流行り謡の約六割は党・政府幹部の腐敗を風刺したものであり、特に公費による飲み食いを批判したものが多い。

岡[1997a]では、岡[1995d]で十分言及できなかった、①開放政策下の流行り謡をとりまく政治的、社会的環境の特質、②流行り謡に託した民衆の本音の所在、の二点に関して解明を試みた。すなわち、流行り謡をとりまく環境の特質が、a) 貧富の格差や役人の腐敗などの社会的矛盾の拡大、b) 流行り謡のマスコミ報道解禁（制限つき容認）にある点を指摘し、か

つ、この二つが一九八〇年代半ば以降の空前の流行り謡ブームを生み出した要因であることを明らかにした。また、民衆は社会的不平等や役人の腐敗には不満を抱きながらも、共産党政権の急激な崩壊により極度の社会的混乱が生じた旧ソ連や東欧の轍を踏むことは望んでおらず、流行り謡をストレス解消の手段として用いている。

岡[1997b]では、主として一九九五年から一九九六年にかけて流行った謡を取り上げた。鄧小平が最高実力者の地位から完全に身を退いたのは一九九四年九月に開催の四中全会においてのことであり、九七年二月十九日に九十三歳で逝去するまでの二年余りは、まさに鄧小平から江沢民への実質的な政権移行期であった。この時期の流行り謡で目につくのは、党・政府幹部が権力にまかせて愛人を囲ったり、性的な接待を受けたりする風潮を揶揄した内容のものである。

本稿では、まず一九八〇年代半ば以降の流行り謡に関するマスコミ報道と中国の開放政策の左右への振れとの関係を香港の月刊四誌の流行り謡関連記事に着目し、分析を試みる。さらに、一九九八年に公刊された『西藏文学』増刊号、陸[1998]および魯[1998]の内容を検討し、岡の一連の研究において取り上げた流行り謡との異同を論じ、江沢民政権下の中国社会の現状を反映した新しい謡を約三十篇紹介する。

2. 流行り謡をめぐる報道と開放政策の左右への振れの関係

一九八〇年代半ば以降の未曾有の流行り謡ブームは、序で述べたように、腐敗現象の蔓延という流行り謡発生のための土壌が熟したことに加え、当局の流行り謡容認が引き金となって生じたものであった。党や社会主義そのものを罵倒する内容のものでない限り、流行り謡は中国国内のマスコミに散発的に登場するようになった。筆者による流行り謡の研究は、香港で発行される雑誌の記事の中から流行り謡を拾い集め、カード作りをすることから始まった。当初は主として、『九十年代』⁽¹⁾および『争鳴』⁽²⁾か

ら採集したが、『鏡報月刊』⁽³⁾や『広角鏡』⁽⁴⁾などの雑誌にも目を通した。

これらの雑誌では、時折流行り謡を特集した記事や流行り謡に関連した記事が掲載された⁽⁵⁾。特集記事が散見されるようになったのは、一九八八年に入ってからであり、翌八九年上期までに五篇が掲載された。一九八八年五月に豚肉、鶏卵、野菜、砂糖の四種類の副食品の統制が解除されたことから同年夏には狂乱物価が発生し、八八年、八九年はともに小売り物価指数が二桁の上昇を記録し、生活苦に陥った民衆の不満が大いに高まった。流行り謡特集記事の掲載は、こうした動向を反映していると解釈される。ちなみに、八七年および八八年の対前年比GDP成長率はともに二桁を示しており、経済発展に伴い、貧富の格差の拡大、役人の汚職の蔓延など社会的な歪みが増大した点も見逃せない。特集記事とGDP二桁成長の間には一年ほどのタイムラグが存在する。

ところが、八九年下期から九二年にかけての二年半では特集記事は一篇のみである。これは、八九年六月四日に勃発した天安門事件をめぐる報道に大きく紙面を割いたため、あるいは事件後政策が左に振れて統制色が強まり、経済成長にブレーキがかかったためであろう。ちなみに、GDPでみると、一九八八年に対前年比成長率が十一・三%であったものが、八九年には四・一%、九〇年には三・八%にまで落ち込んだ。

一九九二年初頭に鄧小平が「南巡講話」において、市場経済制度の積極的な導入と高度経済成長路線への転換を促す発言を行ったことを受けて、同年以降四年間GDPは二桁成長を示した。流行り謡に関する特集記事は一年のタイムラグで、九三年三篇、九四年三篇、九五年二篇、九六年二篇が掲載された。九三年から九五年にかけての三年間、小売り物価指数は二桁の上昇を示した。

一九九六年秋以降、九九年九月現在に至るまで、香港の四誌では流行り謡の特集記事が見受けられない。その理由として、次のような政治的、経済的要因が考えられる。すなわち、九六年以降GDP成長率が一桁に落ち

着き、同年以降小売り物価上昇率も急激に縮小し、九八年には一転してマイナスとなり、デフレ現象さえ生じたこと、九七年七月の香港返還を控えた時期には返還に関連する記事に紙面を割かざるを得なかったこと、返還後は各誌とも中国当局の顔色を窺わざるを得なくなったことが挙げられる。さらに、流行り謡の大半は役人の汚職や腐敗ぶりを風刺したものであるが、すでに極めて多くがマスコミに登場しており、謡の内容そのものが今や特集を組むほどの新鮮味に欠けるためでもあろう。

これまで述べた点を整理してみると、流行り謡に関する香港誌の特集報道には二つの「山」と二つの「谷」が存在する。第一の「山」は一九八〇年代後半の経済成長とインフレが二桁を示した時期である。第一の「谷」は八九年の天安門事件以降の保守派の勢力が強まった時期である。第二の「山」は鄧小平の「南巡講話」を引き金とする高度経済成長路線転換後の数年間である。第二の「谷」は香港返還を控えた九六年秋以降現在に至る時期である。特に、「山」は二桁インフレ期にほぼ重なり、民衆の不満の高まりを反映していると言えよう。

香港誌では流行り謡の特集記事が掲載されなくなったが、中国で流行り謡が下火になったというわけではない。一九九八年一月二十一日付け『産経新聞』は「中国で戯れ歌流行」という見出しの記事の中で、庶民が憂さ晴らしのために新旧の指導者の名前を織り込んだ「戯れ歌⁽⁶⁾」を流行らせている、と報じている。また、一九九八年秋に、流行り謡を採録した雑誌の特集号および二冊の単行本が相次いで公開されたことも流行り謡ブームが依然衰えを見せていない事実を裏付ける。言論の自由が保障され、かつ流行り謡の土壌となる民衆の不満が解消されない限り、流行り謡ブームが衰退することはなかろう。

3. 一九九八年公刊の特集雑誌・単行本にみる流行り謡の特徴

3. 1 一九九八年公刊の特集雑誌・単行本の特徴

『漫話中国新民謡』と題する流行り謡特集号は、『西藏文学』の増刊号であり、一九九八年秋に四川省成都で発行された⁽⁷⁾。この特集号では、項目として立てられた五十七篇の流行り謡の全てに挿し絵が添えられており、流行り謡の内容を視覚的に際立たせている点が大きな特色と言える。また、それらの流行り謡の背景となった汚職事件など、多数の具体的な事例を挙げて解説を加えている点も注目に値する。類似のヴァージョンを含めると、全部で百六篇が収められている。そのうちの六割強が政府役人、党幹部、国有企業トップなどの腐敗や仕事ぶりを風刺したものであり、残りの四割弱は社会の風潮を揶揄したものである。ほとんどが岡の一連の研究で取り上げた謡（類似の謡を含む）であり、目新しい内容のものは十数篇に過ぎない。

陸[1998]は一九九八年九月に香港で公刊された。流行り謡を七つの項目に分類し⁽⁸⁾、合計百九十三篇を採録している。その中には二十余年前に流行った謡も含まれている⁽⁹⁾。岡の一連の研究で取り上げなかったタイプのものが三十篇以上収められており、非常に興味深い。それらの中から一九九〇年代後半の現状を反映した秀作を選び、紹介してみたい。

魯[1998]は一九九八年十月到北京で出版された。流行り謡の内容に基づき、五十項目に分類し三百八十篇余りを採録している。項目ごとに挿し絵が一点ずつ添えられているのが特徴的である。また、各項目の謡の背景に関するごく簡単な解説が加えられている。巻末に「付録」として六十篇余りが追加収録されており、当該書には合計四百四十篇余りが掲載されている。

これら三種類の雑誌・単行本に共通した特徴として、何から謡を採集したのか出所が示されていない点が挙げられるが、手軽な「読み物」という

性格からして、致し方ないことである。

また、謡が流行った時期、地域に関する記述もほとんどないのがもう一つの共通した特徴であるが、この点は岡[1997a]で述べた通り、さほど問題ではない。すなわち、民俗学が扱う民謡、説話、神話などの類は時代を超えてタテに「伝承」されるものであり、伝承の時期や経路が重要な意味を持つ。他方、流行り謡は同一時代をヨコに「伝播」されるものである。開放政策下の流行り謡は、新聞、雑誌、ラジオなどのマスコミを通じて、あるいはくちコミにより、短期間で全国各地へ伝播される。謡の題材も役人の腐敗や拝金主義の風潮など、中国全土に普遍的な社会現象を扱ったものが大半を占め、最初にどの地域で流行り始めたのか特定できないことが多い。こうした事実から、開放政策下の流行り謡について、各々の謡の系譜を辿り、発生地、発生時期を特定することは困難な上、それほど意味のあることではない、と思われる。

3. 2 流行り謡にみる一九九〇年代後半の中国社会

3. 2. 1 蔓延する腐敗現象

役人の腐敗を揶揄した流行り謡は相変わらず非常に多いが、すでに出尽くした感があり、新鮮な内容のものは少ない。中央の指導者の名前を織り込んだ謡が目につく程度である。次の謡は、反腐敗闘争の高まりの中での、保身の術に長けた汚職役人の典型的な行動パターンを巧みに表現している。

- (1) 交明留暗,
交湿留干,
交小留大,
交險留安。(漫-13)

公然と受け取った物は差し出すがこっそり受け取った物は取
っておく

酒やタバコなどの品物は差し出すがカネは取っておく

つまらない物は差し出すが高価な物は取っておく

あとで面倒が生じそうな人からの贈り物は差し出すが絶対に
裏切らない人からの贈り物は取っておく

“明”は公然と送り届けられるカネや品物，“暗”はこっそりと届けられるものを指す。“湿”（湿ったモノ）は高級酒を象徴しており，品物全般を指す。他方，“干”（乾いたモノ）は札束である。“險”（危険なモノ）は親しくない相手からの贈り物で，後日収賄の罪に問われる可能性のあるモノを指す。一方，“安”（安全なモノ）は親密な関係にある相手からの贈り物で，将来収賄の事実がバラされる危険性のないモノを指す。

（２） 貪汚腐敗“成系統”，

反腐倡廉“未见行”；

市场经济“理难清”．（漫-15）

汚職と腐敗は「系統立てて行われ」，

腐敗の防止と清廉の提唱は「未だに行われぬ」；

市場経済は「その理(コトワリ)がはっきりしない」。

“成系統”は明らかに汚職事件で解任された陳希同・元北京市党委員会書記を指している⁽¹⁰⁾。同様に，“未见行”は尉健行・党中央規律検査委員会書記を，“理难清”は李風清・國務院副総理を指している。汚職事件で解任された陳希同に対する民衆の非難の声は大きい，尉健行と李風清の二者はたまたま語呂合わせで名前が出たに過ぎず，名指しで非難されているわけではない。反腐敗闘争は，開放路線に転換以来，数年おきに繰り返しているが，ほとんど成果が上がっておらず，「未だに行われぬ」と皮肉たっぷりに謡っている。この項の（５）で取り上げる「反腐敗闘争のコツ」という流行り謡を目にすれば，成果が上がらない理由も納得できる。

ちなみに，前章末で取り上げた『産経新聞』の記事の中で紹介されている流行り謡は，この謡の類似ヴァージョンで，次の通りである⁽¹¹⁾。

（３） 貪汚腐敗成系統

反腐倡廉未见行

姓社姓资理难清

改革开放无邦国

汚職と腐敗は系統だてて行われ

腐敗の防止と清廉の提唱は未だ行われぬ

社会主義か資本主義か理(コワリ)がはっきりせず

改革開放で国家が消滅する

“无邦国”は呉邦国・党中央政治局委員を指す。第四句を“改革开放无邦国”（改革開放は国の助けとはならない）とするヴァージョンもある。

（４） 満朝文武呉官正,

反腐倡廉尉建行,

国事家事李嵐清,

平民百姓榮毅仁. (陸-61)

役人はみな呉官正

腐敗の防止と清廉の提唱は尉建行

国事も家庭の諸々も李嵐清

平民庶民は榮毅仁

中央の指導者四人の名前を織り込んだ謡であるが、非常に語呂が良い。

呉官正は“无官正”（正義の役人はいない）、尉建行は“未见行”（未だ実行されない）、李嵐清は“理难清”（理(コワリ)がはっきりしない）、榮毅仁は“容易忍”（容易に耐えられる）をもじっている。したがって、この謡の言わんとするところは次の通りである。

文官武官を問わず正義の役人は一人もおらず

腐敗の防止と清廉の提唱は未だ行われず

国事も家庭の諸々も理(コワリ)がはっきりしないが

一般大衆はいくらでも容易に耐えられる

第四句の「いくらでも容易に耐えられる」というのは庶民の居直りであり腐敗の蔓延する社会に対する庶民の怒りの声である。

なお、呉官正は党中央政治局員で、幹部の不正、腐敗の摘発に尽力したことで知られる人物であり、単なる語呂合わせに名前を用いられているだけである。榮毅仁は元国家副主席である。

- (5) 反下不反上,
反小不反大,
反软不反硬,
反远不反近,
反死不反活。(魯-24・25)

(反腐败闘争のコツは)

下に対してはやるが上に対してはやらない
小物に対してはやるが大物に対してはやらない
弱い奴に大してはやるが強い奴に対してはやらない
疎遠な者に対してはやるが近しい者に対してはやらない
死んだ者に対してはやるが生きている者に対してはやらない

この謡は、反腐败闘争の成果が上がない理由をはっきり示している。

- (6) 要想富，多跑部；
烟酒、土产搭桥，
“工农兵”来铺路；
“四大领袖”出面，
美元、英镑结束。(漫-83)
カネ持ちになりたけりゃ、役所へ足しげく通おう
タバコや酒，土産が橋渡しとなり
「十元札」は道を均してくれる
でもやっぱり「百元札」がお出ましにならねばならず
米ドルや英ポンドを用いれば事は成就する

“部”は国务院の「部」(日本の「省」に相当)であり、政府機関を象徴している。許認可の権限を握っている役人に賄賂を渡せば、カネ儲けができるという現状を巧みに表現している。百元紙幣には、“四大领袖”(四

人の偉大な指導者），すなわち，毛沢東，周恩来，劉少奇，朱徳の肖像が描かれている。十元紙幣には，元々“工农兵”（労働者，農民，解放軍兵士）が描かれていたが，一九八七年に人民元のデザインが一新され，現行の十元札には漢民族とモンゴル族の像が描かれている。旧十元紙幣は「大団結」という俗称をもち，長く民衆に親しまれたため，九〇年代後半に至っても“工农兵”が十元札の「代名詞」として用いられている。

（7） 烟酒搭桥，

工农兵铺路

四大领袖出面。（魯-65）

タバコや酒が橋渡しとなり

十元札は道を均してくれるが

やっぱり百元札がお出ましにならなきゃダメ

（8） 毛主席向前看，

院里尽是贪污犯；

毛主席向右看，

风风火火办妓院；

毛主席向左看，

没钱莫进公检院；

毛主席向后看，

解放了工人吃不上饭。（陸-68）

毛主席が前を向く

役所の中は汚職犯ばかり

毛主席が右を向く

勢い盛んな風俗産業

毛主席が左を向く

カネのない奴は公安局，検察局，裁判所へ入るべからず

毛主席が後ろを向く

労働者は解放されて飯が食えない

某市の毛沢東像の正面に政府機関，右手にダンスホール，サウナ，ヘアーサロン，左手に司法関係機関の建物，背後にレイオフされた労働者の経営する屋台が並んでいるさまを謡っている。“妓院”（妓楼）とあるのは，中国では，ヘアーサロンやシャンプー店の看板を掲げた売春窟が多いためである。“解放”は“下岗”（レイオフされる）を皮肉った表現である。

- (9) 不怕酒精烧胃,
不怕尼古丁伤肺,
不怕爱滋病缠身,
不怕受贿犯罪. (陸-166)
アルコールが胃を焼くのを恐れない
ニコチンが肺を傷つけるのを恐れない
エイズに感染するのを恐れない
収賄の罪を犯すのを恐れない

高級幹部ともなると，三日と空けずに宴会があり，高級タバコは贈り届けられるので買う必要はなく，性的な接待も享受できるし，高額商品や札束の賄賂攻勢も受ける。

3. 2. 2 全般的な社会現象

- (1) 中央首长空中行,
省地领导“两头平” ;
县上领导帆布篷,
乡镇企业130 ;
百姓只有“自来铃”. (漫-38)
中央のトップは飛行機に乗り
省や地区のお偉いさんは「乗用車」に乗り
県のお偉いさんはジープに乗り
郷鎮企業のお偉いさんは130型の軽トラックに乗り
庶民には「自転車」しかない

この謡の類似版は岡[1995d]に収録済みであるが⁽¹²⁾、庶民には自転車しかない、という部分が面白いので紹介した。「地区」は「省」の一つ下の行政単位である。“両头平”（両端が平）とは、前部のボンネットと後部のトランクの部分が低くなったタイプの車、すなわち、典型的な乗用車の形を指している。

- (2) 上校、中校、少校,
 转到地方“无效”;
 上尉、中尉、少尉,
 转到地方“无位”。(漫-77)
 大佐、中佐、少佐は
 民間へ移れば「役立たず」
 大尉、中尉、少尉は
 民間へ移れば「職がない」

文革終中は、国営企業労働者と並んで人気が高かった軍人も、市場経済の下で、退役後の再就職に頭を痛めている、という現実がこの謡からよくわかる。“校”と“效”，“尉”と“位”は同音である。蛇足ながら，“地方”は「軍隊」に対する「民間」を意味する。

- (3) 青春献给党,
 老了没人养;
 本想靠儿女,
 儿女下了岗。(漫-82)
 青春を党に捧げたのに
 年老いても養ってくれる者がいない
 元々子供に頼ろうと思っていたが
 子供はレイオフされてしまった

この謡も、赤字国有企業のリストラ、操業停止、倒産、身売りなどが大きな社会問題となっている現状を反映している。一九九八年末現在、全国のレイオフ者は八百九十二万一千人で、うち国有企業のレイオフ者は六百十

万人である（三菱総合研究所[1999]p. 77）。“下岗”（レイオフ）は実質的には失業である。

- （４） 張思德不烧炭了，
 雷锋叔叔不接站了，
 白求恩调出医院了，
 老愚公也不干了。（陸-134）
 張思德は炭焼きをやめた
 雷锋おじさんは出迎えをしなくなった
 ベチューンは病院から転出してしまった
 愚公も働かなくなってしまった

張思德は四川省出身の、長征にも参加した紅軍兵士であり、全身全霊人民のために服務した優秀な共産党員であった。一九四四年九月、陝西省の山中で炭を焼いていた時に炭焼きがまが崩壊し、死亡した。毛沢東は彼の死を悼み、「人民のために服務する」と題する有名な追悼演説を行った。

雷锋は湖南省出身で、七歳で孤児になり、後に解放軍に入隊し、一九六二年に災害救助活動の際の事故で殉職した。毛沢東の著作の学習と大衆に奉仕する模範的な人物として、一九六三年に毛沢東の音頭取りで「雷锋に学べ」運動が始められた。

白求恩(Norman Bethune)はカナダ人の外科医で、抗日戦争勃発後中国解放区に入り、医療工作に従事したが、一九三九年十一月に感染中毒のため河北省で死去した。同年十二月、毛沢東は「ベチューンを記念する」という一文を発表し、彼の国際主義精神を讃えた。

愚公は『列士』にある寓話の主人公で、不屈の精神で家の前にそびえる山を切り崩すという難事業に当たった。一九四五年六月、毛沢東はこれを題材にして「愚公山を移す」という文を書き、愚公精神にのっとり、国土の改造を進めることを提唱した。

したがって、上の謡に登場する四人はいずれも毛沢東時代に人民が手本とすべき模範的人物として賞賛されたが⁽¹³⁾、国民総拝金主義に陥ってし

まった現在、人民や国家のために滅私奉公する者などいない。「雷鋒に学べ」運動は現在に至るまで繰り返行われているが、民衆の反応は今一つである。魯[1998]にも類似の謡が収録されている⁽¹⁴⁾。

- (4) 世上只有妈妈好,
但愿妈妈不要老;
年轻的妈妈是个宝,
老了的妈妈是棵草。(魯-227)
世の中で母さんだけが素晴らしい
でも母さんが年とらないことを願う
若い母さんは宝物
年老いた母さんは一本の草

伝統的な敬老精神や家族関係が失われ、老人が邪魔者扱いを受けるケースが頻発しており、ついに流行り謡にまで登場するようになった。

3. 2. 3 結婚観の変化と性的モラルの崩壊

- (1) 结婚是失误,
离婚是觉悟,
再婚是谬误,
复婚是执迷不误;
生孩子是犯个大错误,
一人过什么都不耽误。(漫-91)
結婚はうっかりミスだ
離婚は自覚のたまものだ
再婚は間違いだ
復縁は頑迷で誤りを悟らないことだ
子供をつくるのは大きな過ちだ
一人身で過ごしても何も困らない

拝金主義が横行する中、打算的な結婚も増え、それに伴い離婚も急増して

いる。上の謡はそうした社会的風潮を揶揄している。次のような類似版もある。

- (2) 结婚是失误,
独身是觉悟,
离婚是醒悟,
再婚是执迷不悟,
没有几个情妇是废物。(鲁-198)
- 結婚はうっかりミス
独身は自覚のたまもの
離婚は迷いからの目覚め
再婚は頑迷で非を認めぬこと
二、三人の情婦もいない奴は能なしだ

- (3) 向钱进,
向钱进,
钞票的力量大,
妇女们来献身。(陸-226)
- カネに向かって進め
カネに向かって進め
紙幣の力は大きく
女性は肉体を献上する

「黄色娘子軍」(売春婦部隊)と題するこの謡は、文革中に流行った革命京劇『紅色娘子軍』に由来し、売春が大きな社会的問題になっている事実を反映している。「紅色娘子軍」は国共内戦時に海南島で活躍した、女性のみで編制された部隊である。この劇は映画化されたが、上の流行り謡はその主題歌の出だしの部分の替え歌である。ちなみに、元の歌の出だしは次の通りである。

向前进,
向前进,

战士的责任重,

妇女的冤仇深.

前進せよ

前進せよ

兵士の責任は重く

女性の恨みは深い

- (4) 解放前这里的红色娘子军,
是斩不尽杀不绝的;
现在这里的“黄色娘子军”,
也是斩不尽杀不绝的. (魯-172)

解放前の当地の紅色娘子軍は
どうしても全滅されられなかった
現在の当地の「黄色娘子軍」も
全滅させることなどできない

かつて紅色娘子軍が活躍した海南島では、今や風俗産業花盛りといった観がある。

- (5) 睡老婆太乏味,
找情人太累,
叫小姐太贵,
下岗女工最实惠. (陸-227)
- 女房と寝るのは余りにも味気ない
愛人を探すのは余りにも疲れる
女の子に声をかけると余りにも高くつく
レイオフされた女子工員が一番実用的だ

レイオフされた労働者の再就職率はおよそ五割に過ぎない。国有企業をレイオフされた女子工員のほとんどは、高度な技術や技能を身につけていないため、職業訓練を受けない限り、再就職の道は険しく、売春に従事する者もいる。

(6) 握着情人手, 溫柔随我走;

握着小秘手, 美味如烈酒;

握着野鸡手, 刺激又颤抖;

握着老婆手, 左手握右手. (漫-92)

愛人の手を握ると, 暖かく柔らかで自分の意のままになる

若い女性秘書の手を握ると, 強い酒のように美味だ

売春婦の手を握ると, 刺激的で震えがくる

妻の手を握ると, 左手で右手を握ったように味気ない

高級幹部の性的モラルの崩壊に加え, 社会全体の退廃的な風潮も目に余る。
これから取り上げるいくつかの流行り謡はそうした風潮の蔓延を物語っている。

(7) 牵着姑娘的手,

好像回到十八九;

牵着情人的手,

酸甜苦辣全部有;

牵着爱人的手,

好像左手握右手. (魯-197・198)

若い女性の手を引くと

まるで十八、九に戻ったようだ

愛人の手を引くと

万感胸に迫るが

女房の手を引くと

まるで左手で右手を握るように味気ない

(8) 赶走东北狐,

还我好丈夫;

赶走四川妹,

丈夫回家睡. (魯-173)

東北の女狐を追い払っておくれ

私に大事な夫を返しておくれ

四川の女を追い払っておくれ

そうすりゃ夫は家で寝る

華南の沿海地区は早くから経済が発展し、豊かであり、東北地方や四川省の貧しい農村からの出稼ぎが大量に流れ込んでいる。“北妹”（北からやって来た女の子）とか“四川妹”（四川省出身の女の子）の中には手っとり早く稼ぐため、売春に走る者が多い。上の謡はそうした女性にのめり込んでしまった夫を持つ主婦の嘆きである。

- (9) 拷外国密,
打“奔驰”的,
喝“威士忌”,
穿新巧衣,
哼流行曲,
炒美元,
花港币,
得爱滋病,
洗桑拿浴。(魯-206)
外人の女の子を連れて
「ベンツ」のタクシーに乗り
「ウイスキー」を飲み
凝った服装をして
流行歌を口ずさみ
米ドルの闇取り引きをし
香港ドルを使い
エイズに感染し
サウナへ行く

金持ちになった自営業者の行動も輦蹙ものである。エイズが流行り謡に登場したのは最近のことである。“外国密”（外人の女の子）の“密”は英

語の miss の音訳“密司”の短縮形である。同様に, “的”は taxi の音訳“的士”の短縮形である。

(10) 一种人手持大哥大,

出门坐豪华,

吃喝信用卡,

搂着十七八;

二种人腰挎BP机,

出门就打的,

吃喝甩现钱,

时常打“野鸡”;

三种人见面递名片,

出门骑车转,

偶尔解解馋,

回家搂着老婆干。(魯-115)

一番手の人間は手に携帯電話を持ち

お出かけは高級乗用車に乗って

飲み食いはクレジット・カードで

十七、八の女の子を抱く

二番手の人間は腰にポケベルをぶらさげ

お出かけはタクシーに乗って

飲み食いは現金をばらまき

しょっちゅう「娼婦」を買う

三番手の人間は会うと名詞を渡し

お出かけは自転車に乗って

たまには美味しいものを食い

家へ帰って女房を抱いて寝る

この謡は、羽振りの良い一番手の自営業者と二番手、三番手の対比が面白い。

3. 2. 4 現代若者気質とファッション

- (1) 星期一，放电；
 星期二，牵手；
 星期三，“初吻”；
 星期四，热恋；
 星期五，美丽谎言；
 星期六，浪漫“吻别”；
 星期日，再找一个。（鲁-198）
 月曜日にテレビで放映
 火曜日に手をつなぎ
 水曜日に「ファースト・キス」
 木曜日に大恋愛
 金曜日にうまいこと言って騙し
 土曜日にロマンチックな「別れのキス」
 日曜日に次の相手を探す

“放电”とは、「結婚相手求む」というテレビ広告を流すことを指す。中国のテレビにはお見合い番組も多い。

女性の過激なファッションを皮肉った謡もいくつかある。

- (2) 脸面抹得像白薯，
 眼圈画得像熊猫，
 嘴唇染得像血葫芦。（鲁-210・211）
 顔はイモのように白く塗り
 目の周りはパンダのように描き
 唇は血のしたたる瓢箪のように塗りたくっている
- (3) 超短裙，露内裤，
 矮胸露出半个乳。（鲁-211）
 超ミニスカートで，パンツ丸出し
 貧弱な胸元から半分オッパイがのぞいている

- (4) 眼鏡戴在天灵盖,
衬衫短得露脐眼,
皮鞋后跟没有带,
十个脚趾十个色。(鲁-210)
メガネは頭のとっぺんに載せ
シャツはへその穴が見えるほど短く
革靴のかかとにはベルトがなく
十本の足の指は十種類の色

頭にサングラスをのせ、へそ丸だしのシャツを着て、サンダルをはいて、足の指には色とりどりのペディキュア、というファッションを嘲笑している。

3. 2. 5 民主化を待ち望む声

経済の開放は進んでいるが、共産党による専制政治は依然として続いており、民主化の早期実現を望む声が巷に溢れている。ことに、一九九九年は建国五十周年、「五四運動」八十周年、「天安門事件」十周年に当たる記念すべき年であることから、数字の「九」を織り込んだ謡が流行った。

- (1) 五九年彭德怀含冤,
六九年刘少奇倒台,
七九年华国锋下野,
八九年赵紫阳蒙尘,
九九年冤魂齐聚,
推翻专制迎来民主。(陸-215)
五九年には彭徳懷が冤罪を被った
六九年には劉少奇が失脚した
七九年には華国鋒が下野した
八九年には趙紫陽が政権を離脱した
九九年には冤罪で死んだ者の魂が集い

専制を覆し民主を迎える

(2) 五九饿死人,

六九整死人,

七九罪死人,

八九吓死人,

九九即将来临,

驱逐专制乐死人。(陸-213)

五九年には餓死した

六九年にはつるし上げをくって殺された

七九年には罪に陥れられて殺された

八九年には死ぬほどびっくりした

九九年がまもなくやって来て

専制が駆逐されればこよなく嬉しい

年号は各々、大飢饉、文革初期の武力闘争、文革末期の四人組の専横、天安門事件を象徴しており、必ずしも当該年に発生した出来事を指すわけではない。

3. 2. 6 公害問題

蘭州の大気汚染を嘆く謡を二篇紹介する。

(1) 太阳和月亮一个样,

晴天和阴天一个样,

鼻孔和烟囱一个样。(魯-165)

太陽と月が同じ様だ

晴れた日と曇った日が同じ様だ

鼻の穴と煙突が同じ様だ

(2) 楼房高, 马路平

人在雾中行。(魯-165)

ビルは高くそびえ、道は舗装されたが

人はスモッグの中を行く

次の謡では、河南省の河川の汚染を嘆いている。

- (3) 50年代淘米洗菜,
60年代洗衣灌溉,
70年代水质变坏,
80年代鱼虾绝代,
90年代身心受害。(魯-165)
50年代は米をとき野菜を洗った
60年代は洗濯をし灌漑に用いた
70年代は水質が悪化した
80年代は魚やエビが絶滅した
90年代は心身に害を及ぼす

この謡の類似版は岡[1995d]で紹介済みだが⁽¹⁵⁾、九〇年代が加わりバージョン・アップしている。一九九七年に公表された「環境状況公報」によると、九六年に環境汚染として報告された事故で、汚染にさらされた人数は合計五十一万一千二百二十四人に達し、四千三百五人が発病した(相川泰[1998]p. 175)。また、都市域の河川の七十八%は飲料に適さず、都市の地下水の五十%が汚染されている(相川[1998]p. 175)。

4. 結び

一九八九年六月の天安門事件で失脚した趙紫陽のあとを受けて、江沢民は中国共産党総書記というトップの座に就いたが、「最高実力者」として君臨していたのは鄧小平であり、江沢民はあくまでも鄧小平の意を汲んで政権を運営する存在に過ぎなかった。江沢民政権の基礎固めが始まったのは、鄧小平が政界から完全引退した一九九四年九月以降のことであり、九七年二月の鄧小平の逝去によって、本格的な江沢民時代が到来したと言える。本稿では、香港誌の流行り謡特集記事と開放政策の左右への振れを論

じるとともに、一九九八年に公刊された三点の雑誌・著作に基づいて、江沢民政権揺籃期である一九九〇年代後半に流行った謡を取り上げた。

一九九〇年代前半までの流行り謡と比較した場合、次のような特色をもった流行り謡が創出された点が目新しく感じられる。

- ①陳希同、尉健行、李嵐清などの中央の指導者名を織り込んだ謡が登場した。九〇年代前半までの謡とは登場人物が異なる。
- ②国有企業の業績悪化に伴うレイオフ者の増大を反映して、“下岗”（レイオフ）という言葉が登場した。
- ③高級幹部のみならず、社会全体の性的モラルが崩壊し、“愛滋病”（エイズ）を織り込んだ謡が登場した。
- ④へそ出しルックなどの驚くほど大胆な若者のファッション感覚を批判した謡が登場した。

このほかに、伝統的な敬老精神の喪失を嘆く謡、結婚観の変貌を皮肉った謡、民主化を求める謡、大気汚染を取り上げた謡なども注目に値する。

【注】

- (1) 一九七〇年二月に『七十年代』として創刊された。当初は中国寄りであったが、のちに中立の立場をとるようになった。八四年五月から誌名を『九十年代』に改めた。編集長の李怡氏は著名なジャーナリストであり、香港を代表する月刊誌であったが、一九九七年七月の香港返還後、経営が悪化し、一九九八年五月号を限りに休刊した。
- (2) 一九七七年十一月に創刊された。反中国的な編集方針の月刊誌であり、かつては中国国内で「反動雑誌」のやり玉に挙げられていた。香港返還後は論調が軟化し、往年の鋭さが失われてしまった、との評価は免れ得ない。
- (3) 一九七七年に創刊された中立系の月刊誌。
- (4) 一九七二年に創刊された中国寄りの月刊誌。

(5) 以下では、タイトルから流行り謡を特集した記事あるいは流行り謡に関連した記事であることがわかるものを便宜上一括して「特集記事」と呼ぶ。四誌の特集記事を年代順に並べると、次の通りである。

- ①一九八八年六月号：承嬰「改革与民生：怎一個愁字了得！」『九十年代』
- ②一九八八年八月号：明華「民謡什錦小拚盤」『九十年代』
- ③一九八八年十二月号：胡志安「從民謡看当今中国」『広角鏡』
- ④一九八九年二月号：王海倫「口頭文学熱与全民牢騷潮」『九十年代』
- ⑤一九八九年二月号：阿喬「倣古風体‘妙’民謡」『鏡報月刊』
- ⑥一九九一年九月号：南橋「話与笑----北京兩首順口溜」『争鳴』
- ⑦一九九三年六月号：王旦「国情民謡」『争鳴』
- ⑧一九九三年十月号：楊知著「烏龜王八下台去，毒蛇猛獸上台来----大陸民謡对政治生活的諷諭」『九十年代』
- ⑨一九九三年十一月号：楊知著「毛沢東南巡搞文革，鄧小平南巡搞搶劫----大陸民謡对政治生活的諷諭（下）」『九十年代』
- ⑩一九九四年三月号：王萌「從大陸順口溜説起」『争鳴』
- ⑪一九九四年七月号：亦兵「從一首民謡看大陸社会」『鏡報月刊』
- ⑫一九九四年八月号：晚君「從民謡看民心民情民意民怨」『争鳴』
- ⑬一九九五年四月号：摘芸「諷刺腐敗的新民謡」『九十年代』
- ⑭一九九五年九月号：羊金「順口溜，斥腐敗」『鏡報月刊』
- ⑮一九九六年二月号：秦儒海「世紀末民謡聯唱」『争鳴』
- ⑯一九九六年九月号：野潭「從市井俗諺看大陸世風」『鏡報月刊』

なお、これらの特集記事のほかに、「大陸新民謡兩則」といった類の、流行り謡を二、三篇紹介した短い囲み記事が数多く掲載された。岡[1995d]では、上述の四誌以外に『明報月刊』，『百姓』，『中国之春』，『民主中国』，『亞洲週刊』等の雑誌からも流行り謡を採集したが、これらの雑誌については八〇年代半ば以降の全ての号に目を通したわけではないため、本稿での分析対象からはずした。

- (6) 本稿で「流行り謡」と称している政治や社会を風刺した謡は次のように呼ばれることもある。例えば、「民謡」(柿崎進[1974])、「土謡」(藤沢由蔵[1942])、「民歌」(柿崎[1974])、「ざれ歌」(竹内実[1994])、「落首」(矢吹晋[1996])、「風刺歌謡」(班偉[1996])。なお、流行り謡は中国語では“民谣”あるいは“新民谣”と呼ばれ、その大部分は“顺口溜”という形式をとる。
- (7) 出版年月日は印刷されていないが、前書きの最後の部分に一九九八年八月と記されている。
- (8) うちわけは、「時政篇」三十篇、「官僚篇」二十九篇、「社会篇」四十四篇、「腐敗篇」二十二篇、「公安篇」十七篇、「民生篇」二十一篇、「喫喝篇」三十篇である。
- (9) 例えば、p. 96に掲載の謡は一九七〇年代後半に流行ったものである。
- (10) 北京閩のナンバーワンで超大物、陳希同は公金三千五百万余元りを流用し、二軒の別荘を建てるなどの経済犯罪により、一九九五年四月に北京市党委員会書記を解任され、同年九月には政治局員を解任の上、九七年八月に党籍を剥奪され、九八年七月に懲役十六年の判決を受けた。
- (11) 同紙には、日本語訳と各句の下三字の名前をもじった部分のみが示されている。
- (12) 岡[1995d]pp. 12-13。
- (13) 張思徳、ベチューン、愚公の三者に関する文は、文革初期に林彪らによって『毛沢東選集』から選ばれ、民衆が繰り返し読み、暗唱すべき著作として位置づけられ、『老三篇』と呼ばれた。
- (14) 魯[1998]p. 192。
- (15) 岡[1995d]p. 283。

【参考文献】

- 相川泰[1998]「環境問題」『中国年鑑(1998)』中国研究所(編), 新評論, pp. 174-176.
- 班偉[1996]「中国風刺歌謡研究序説----岡益已著『現代中国と流行り謡』に寄せて」『岡山大学経済学会雑誌』第28巻第2号, pp. 243-253.
- 藤沢由蔵[1942]『黄土の声』華北交通社(北京)
- 甘棠[1989]『中国大陸の順口溜(統集)』(中国大陸叢書36)中国大陸問題研究所(台北)
- 柿崎進[1974]『中国の民歌』現代企画室
- 申田久治[1990]『天安門落書』講談社
- 魯文[1998]『当代順口溜』中国档案出版社(北京)
- 陸非琅[1998]『中国当代民謡』明鏡出版社(香港)
- 三菱総合研究所(編)[1999]『中国情報ハンドブック(1999年版)』蒼蒼社
- 岡益已[1995a]「流行り謡にみる現代中国社会の歪み(Ⅰ)」『岡山大学経済学会雑誌』第26巻第3・4合併号, pp. 151-170.
- [1995b]「流行り謡にみる現代中国社会の歪み(Ⅱ)」『岡山大学経済学会雑誌』第27巻第1号, pp. 53-82.
- [1995c]「流行り謡の形式と言語構造」『岡山大学経済学会雑誌』第27巻第2号, pp. 147-162.
- [1995d]『現代中国と流行り謡----開放政策がもたらした社会の歪み』御茶の水書房
- [1997a]「開放政策下の流行り謡の特徴」『岡山大学経済学会雑誌』第28巻第4号, pp. 171-202.
- [1997b]「流行り謡にみる政権移行期の中国社会」『岡山大学経済学会雑誌』第29巻第2号, pp. 25-60.
- 樹建・左愚[1994]『当代順口溜与社会热点掃描』中国档案出版社(北京)
- 竹内実[1994]『新編・中国を読むキーワード』蒼蒼社

西藏文学編集部[1998]『漫話中国新民謡』（『西藏文学』増刊号，成都）

矢吹晋[1996]「加速する脱社会主義革命」『RONZA』1996年5月号，
pp. 20-25.

超金銘[1989]「中国当代俗語所展現的社会文化意義」『大阪外国語大学論
集』第1号，pp. 85-93.

中共中央毛沢東選集出版委員会（編）[1971]『毛沢東選集』（一卷本）人
民出版社（北京）

The Chinese Society under Jiang Zemin's Regime Observed through Popular Jingles

Masumi Oka

In my previous works, I tried to analyze the various phases of the Chinese society through six hundred popular jingles or “minyao” under the regime of Deng Xiaoping, and also made it clear that the unprecedented boom of popular jingles was caused by the expansion of social contradictions and partial acquiescence of jingles critical of the regime.

In this study, I refer to when and how often special articles on popular jingles appeared in the monthly magazines of Hong-Kong, and try to clarify the interrelation between the special articles and the changes in China's open policies.

Then, I selected about thirty popular jingles which are interesting and impressive. They show some of the typical social phenomena in the latter half of 1990's. They indicate that the corruption among high government officials is prevailing and that the sexual morality of the whole society is also on the brink of a crisis.